

#3 名前に隠された意味

建築研究所
上席研究員 水上 点晴

左官に馴染みの深い「壁」の意味について、考えてみたことはあるだろうか？

筑波山麓の山に囲まれた景色に惚れて、自らの手で家を建てようと求めた土地の登記手続きをした際に、土地には住所表示の番号とは他に、小字^{こあざ}といって名前が付いていることを知った。我が土地の名前は「壁無^{かべなし}」。その不思議な響きに、想像を膨らませながら、この地名の意味を辿りつつ、名前および名付けという行為に秘められた、物と人間相互の関係性について考えてみたい。

まず小字は、近世における村や集落名が、明治の市町村合併時に新たに付与された町名＝大字^{おおあざ}と別に、小字として残されたものである。現代においては免許証や手紙を書く際の住所など、ほとんどの場面で省略されており、近代では廃止される傾向にある。実際、人口8,000人以下の自治体への地方交付税額を大幅に削減することで、政府が主導した平成の市町村大合併では、1999年の3,232市町村から2010年の1,727市町村へと約半分に統合され、多くの町名が失われている。建築研究所の周辺でも、つくば市や隣のつくばみらい市といったひらがなの市名、さくらの森や流星台といったビジュアル的な町名、つくばエクスプレスや流山セントラルパークなどカタカナの路線名や駅名が相次いで誕生した一方で、多くの旧町名が統廃合された。それに加えて、研究学園都市の再開発に伴い、町のにぎわいの中心が大きく変更されたことで、土地そのものが持つ歴史が断絶してしまった感がある。この流れは、前号の佐賀関市街地火災における考察で、集落の自主的な組織であった若衆連が、青年団に吸収合併されていく過程で、自治を促し個性を育むエネルギーを奪い取ってしまった構図と、軌を一にしているように感じられた。

それでは名前と共に奪われかねないものとは何だろうか？

名前とは、単なる識別記号とは違い、思考や記憶につながっている。例えば、映画「千と千尋の神隠し」では、自分の名前を奪われると、元の自分をそして帰り方を忘れてしまうような表現がなされている。地名の多くは2文字程度の漢字で表されているものの、象形文字である漢字を使うことで、この限りある2文字に、その土地の気候風土（空間）だけでなく、土地の来歴やひょっとすると未来（時間）まで、多様な情報が凝縮されていたと考えられる。例えば、旧地名に「沼」が入っていれば、埋め立て地の可能性に気づくが、小字が統廃合されてしまうと、地震の際に軟弱となる地盤であることを知らずに家を建ててしまうかもしれない。一方でこのように単純な例は少なく、昔の人が伝えたかった情報は、災害に限ったことではなく、また宛字が使われていたりして、地名は千差万別。命名者は遠い過去の人なのであるから、その字義を読み解くことは難解なミステリーのようなもので、一見、意味が無いように見えて、簡単に捨て去るのも無理はないのである。しかし上質なミステリーが、犯人（答え）を暴くことではなく、推理を通して、他者の思考や過去の記憶と触れ合うことに主眼が置かれているように、「壁無」という地名に秘められた意味を探ることで、意味そのものやその真偽ではなく、名付けという行為の深層に触れられないかと思っている。

まず、「壁^{ひら}」という字の成り立ちを調べてみると、土を辟く^{ひら}となっていて、山を切り開く行為をさしており、文字そのものから受け取る閉じたイメージとは、およそ逆となっていることに驚いた。土を辟く^{ひら}という表現が目新しかったので、用例を調べると、日本書紀に、「八州^{やしま}を掩^{おお}ひて宅^{いえ}とせむこと亦可^よから

ずや…兼^あせて、土^ひを辟^らきて、都^たを興^たてむとす（日本全体を1つの家のようにまとめて、土地を切り開いて都を築こう）」とあり、「八紘一字」の語源とされている。壁無の土地は、筑波山が下って平野部に接する直前の台地にあり、同台地上に中世の砦跡があることから、土を辟いて砦を築いた場所という意味かと受け取られた。

また「壁」という字は、地名としては「皋^{こう}」の宛字として用いられるようで、皋とは、「水辺のそばのおか」の意義があり、①土を辟いた場所というだけでなく、②台地という地形とも、また③すぐ隣に湧水があることも重なり、「壁」だけで3重の意味が込められていると思われた。しかしこれだけでは、「無」が意味するところが分からない。そんな謎が解けたのは、岐阜県にある苗木城を訪れた帰りだった。

苗木城は「赤壁城」の別名があり、美しい白壁の城として完成したが、一夜明けると漆喰が全部落ちて赤土が露出してしまった。何度塗りなおしても、すぐに剥がれ、その理由については、木曾川に住む龍が白い色を嫌い、何度漆喰を塗り直しても嵐を起こしてはぎ取ってしまうという話が残されている。この話に、それより前に聞いていた江戸の落語で、

龍が出てきたときに湧いた疑問を解く鍵があった。その小噺は、以下のように展開する。猫の名前を付けるにあたって、同じネコ科の「虎」が強そうだがどうだ。いや「虎」より「龍」が強い。「龍」は雲を突き抜けられないから「雲」の方が強い。いやいや「雲」は「風」に飛ばされる。「風」は「壁」に止められる。「壁」は「ネズミ」にかじられる。「ネズミ」は「猫」に追いかけられる…でこの猫を「ネコ」と名付けよう…というオチであり、じゃんけんの3すくみならぬ、7すくみとなっている、回りオチと呼ばれるものだそうだ。「猫」＜「虎」＜「龍」＜「雲」＜「風」＜「壁」＜「ネズミ」＜「猫」…。

「ネズミ」が持つ「猫」への敵視はわかるものの、架空の生き物であるがゆえに「龍」が持つ「雲」への敵視が腑に落ちないでいたが、苗木城の逸話でも「龍」が「雲」＝「白」を嫌う姿で描かれており、昔の人の思考法を垣間見た気がした。否、もっと強烈な形でこの循環を体験することになった。岐阜からつくばに戻った私が目にしたのは、「雲」の先、「風」から「壁」へと続く物語である。

岐阜滞在中に、関東地方では非常に強い勢力の台風が上陸し、大雨と暴風で記録的な被害をもたらした。帰宅道中、周囲ではそれほど大きな被害は見ら



写真1 平成25年台風第26号の被害

れなかったの、油断して帰宅した私を待ち受けていたのは、なぎ倒された隣地の檜林と、ところどころ崩れ落ちた我が家の土壁の姿であった。周囲を取り囲む山々の谷筋となる北西側からの、風の流れの延長上に位置しているようで、その地形が漏斗状に風を集めて、周囲の土地より風が強まる地形であることをこの時初めて知ったのである。

「壁無」の文字通り、土壁が崩れて無くなってしまった訳であるが、先の7すくみを思い出し、「風」が強いという地形の性質を言い表すのに、「風強」とは名付けず、「壁無」すなわち「壁」の不在を強調することで、逆説的に「風」の強さを言い表したのだとしたら、センスのある名付け方だと感心した次第である。

すでに4つの地形上の特徴が「壁無」の2字で説明できたわけであるが、話はこれで終わらない。それは子年を控えた令和元年の暮れ、年賀状の話題探しをしていた時のことである。全国には「ねずみ」と名の付く土地が多いとの情報を目にした。そうした土地は、見晴らしのよい丘の上に多く、ねずみは「不寝見」すなわち寝ずの番を行う見張り台であったことを伝えていた。先述の通り、「壁無」の地も、背後に中世の砦跡が控えており、平地に突き出した見張り台であったとしても不思議ではない。そして再び7すくみに立ち返ると、壁が無くなるのはネズミがかじってしまうからとも説明でき、「壁無」を、見張りを行う不寝見^{ねずみ}の地なので壁が無いと表現したともいえるのである。

そして寝ずの番が必要な場所は、見張り台の他にもう1つあることを思いついた。中世に、砂鉄を溶かすために、三日三晩踏んだと言われる「たたら場」である。そこで「たたら場」の適地を調べてみると、原料となる砂鉄を産する山中よりも、重くて大量の薪を運搬する便が良い里に近い場所で、酸素の供給に優れた風の強い地形が好まれていたことが分かった。「壁無」の地も、火力が長持ちするクヌギやコナラの薪炭林となっており、先の説明から分かるように風が強い。さらには周囲に、鉱物を産していたとみられる中世の遺構も存在していることを突き止めた。峰寺山の中腹にある西光院は、平安時代の創建であり、背後に迫る巨石の上に懸け造りで建てられたお寺である。周囲では過去に球状花崗岩が産出

され、地元では小判石と呼ばれている。

山から切り出した鉱物を含む土砂は、山中に設けた溜め池を人為的に決壊させ、土砂崩れを起こす、鉄穴流^{かん}しと呼ばれる手法で、水に溶けた鉱物の比重の違いを利用して、精錬されていた。鉄器集団は比重が重いために上流に残留した砂鉄を利用するわけであるが、下流の平地に住まう農民は、流れ出た土砂で生活基盤の田畑が埋まってしまうため堪ったものではない。鉄穴流しに伴う両者の争いについては、割と近世の訴訟資料でも見つかるが、この初出と思われる資料を、常陸の国風土記より見出した。それには兄と妹が田を植えていると、神が来て「遅く植え終わった方に天罰が下る」という。兄の方が先に植え終わると、妹に雷が落ちてみまかる。兄は仇を討たんと神を追いかけ、山上の岩屋に向かい、刀を抜いて神を問い詰める。神は、子孫末代に至るまで、雷の厄が当たらぬようにするからと許しを乞うという物語である。雷や人と神との争いに仮託されているものの、鉄穴流しに伴う農民の犠牲と鉄器集団への責任の追及と読み替えても、不自然には感じない。加えてこの風土記で語られた舞台が、正に西光院と、「壁無」を含むその麓の集落と比定するに足る逸話もある。

西光院を峯伝いに進むと弁天山に至り、ここにも頂上に大きな岩が鎮座している。ふもとの集落では、峰寺山を男岩、弁天山を女岩と呼び、男女二対の神とあがめている。また弁天山の女岩は、かつてふもとの集落にあったものという言い伝えもあり、雷が落ちてみまかった妹を祀るものと捉えることも可能である。ふもとの集落に古くから残る苗字で、「壁無」の地を取り囲む一族が、生田目家であることも鉄器集団を想起させる。たたら場は、砂鉄を溶かすために高温を維持することが肝要で、温度計など無い昔には、高温の炎を直視して判断するしか術がなく、得てして眼を傷めて失明し、片目となることが多かったそうだ。たたらを三日三晩踏み続けるのも重労働で、かたわとなる者も多く、鉄器集団が祀る神社には、一つ目や一つ足の神が多い。類推するに、生田目姓は「生きた目」を持ち、たたら場での指導的立場にあった一族の末裔と考えられ、その根拠地である「壁無」は、不寝見^{ねずみ}を要した、たたら場であったのかもしれない。



写真2 弁天山頂上

これまでに、「壁無」には4つの地形上の特徴と、見張り台であり、たたら場であったという2つの歴史が隠されていた。最後にもう1つ。私の名前は「点睛」という。今は亡き父親が画龍点睛から名付けてくれたと聞いている。画龍点睛という四字熟語にも物語があり、昔、中国の坊さんが、お寺の壁に龍の絵を描いたが、いつまで経っても瞳を入れない。来る人来る人、なぜ瞳を入れないのかと問うに、この龍はよく描けているから、瞳を入れると本物の龍になって、壁を壊して天に帰ってしまうと答えたそうだ。これより「点睛」は、字義通り言えば「瞳（睛）を点じる」だが、広義には「最後の仕上げをすること」という意味が付与されている。冒頭の壁を壊す龍、そして一つ目の神。家づくりの地に選んだ「壁無」を巡る物語が、いずれも期せずして自らの名前「点睛」に繋がるとは、なんという巡りあわせだろうか。福井の山奥に生まれ、縁もゆかりもない茨城に、自らの意志で移り住んだというのに、まるでその実、最初から用意されていた脚本だったかと思うくらい、「言霊」ではないが、名前そして名付けの神秘に感嘆してしまう。名づけ親の父には、この景色が見えていたのか、今となっては確認する術もな



写真3 手渡して運ばれる龍の卵

いが、家づくりも終盤に差し掛かり、頂いた名前の意味をさらに熟考する機会を得た。

画龍点睛になぞらえて、家づくりの最後の仕上げを、これまでの人生で出会った人々に手伝っていただきたいと考えた。家の完成を寿ぐパーティーを企画し、家づくりで紡ぎ出された物語を、漢詩に託して刻み込んだ龍の卵を用意した。来訪いただいた皆様、一人ひとりの手渡しにより、揺さぶられ、熟した卵は、高々と瓦上に掲げられる。

衆人看視の下、家の完成はゴールではなくスタートであるという想いを胸に、一刀両断に割られる卵。生を受けた龍により、家に息吹が与えられた瞬間の、手から伝わる振動と皆の耳に届いた波動——立ち会った我と彼の間に、確かな繋がりをもたらし龍の咆哮が、土に染みこんで土地とも一体となることで、「壁無」にまた一つ物語が付与されたのではないだろうか。



写真4 一刀両断に割られる卵